

シオン通信

大宮シオン・ルーテル教会 礼拝説教集

2010年10月 第29号

日本ルーテル教団

大宮シオン・ルーテル教会

〒331-0814

さいたま市北区東大成町 1-229

phone/fax : 048-663-0215

URL <http://omiya.church.ne.jp>

Email : himei-y@oregano.ocn.ne.jp

大宮シオン・ルーテル教会

梁 熙 梅(やん・ひめ)

感謝します

今日のように青空が高く晴れた日は、どこかへ出かけて紅葉を楽しみたいです。でも、明日は主日ですから、その準備のために設けられているこの日を大切にしないで…ですね。その分、みなさんがゆっくり紅葉を楽しんでくださればと思います。

さて、10月は韓国への出張のために5日間も教会を留守にしていました。10日の礼拝の奉仕を、また教会の皆さんで担ってくださいました。感謝いたします。10日に行われました礼拝説教(奨励)を、この紙に載せていますので、どうぞお読みください。韓国を訪れたのは、韓国ルーテル教会宣教50周年記念建物「ルター会館」の奉献礼拝に出席するためでした。「ルター会館」は、地下3階、地上24階の27階建の立派なビルでした。屋上には非常時に備えて、ヘリコプターが着陸できる場まで設けられており、それが法律で定められていることとは言え、立派過ぎてうらやましいほどの建物でした。この建物が宣教のために豊かに用いられることを祈っています。また、韓国ルーテル教会と日本ルーテル教団の宣教協力に関する話し合いも、神学生交流に関しては、来年から具体的に進めることになりました。互いによき学びの機会となることを祈っています。そして、日韓の教会が、共に神さまの宣教を担うことができることに、感謝しています。

17日(日)は山口里子さんを招いて、「キリスト教の性教育を考え直そう～聖書学の視点から～」をテーマにお話を聞くことができました。フェミニストの視点より読み直す聖書学ですから、初めての方はショッキングな思いもしたと思います。けれども、どんな人も、神さまの似姿で造られたのですから、私たちの勝手な判断で、多数を中心にする生き方は許されたことではないと思うのです。ひとり一人、みんな違ってみんないい、大切な存在なのです。これからも、このような学びを続けていきたいです。

10月も、多くの悲しみを心に納めて送っている方もいらっしゃるでしょう。反面、多くの喜びを味わう中で送っている方もいらっしゃるでしょう。けれども、それを通して得たものは必ずあります。それを、次の歩みにつなげ、生かしていきたいです。そして、何より、今あるこの悲しみに主が共におられる、主が悲しみに暮れている私を背負っておられる。このことに気づき、感謝できる者であいたい。いつくしみ豊かな主からの多くの恵みと慰めがみなさまと共にありますように。

聖書 ルカによる福音書17章11～19節

11 イエスはエルサレムへ上る途中、サマリアとガリラヤの間を通られた。12 ある村に入ると、重い皮膚病を患っている十人の人が出迎え、遠くの方に立ち止まったまま、13 声を張り上げて、「イエスさま、先生、どうか、わたしたちを憐れんでください」と言った。14 イエスは重い皮膚病を患っている人たちを見て、「祭司たちのところに行って、体を見せなさい」と言われた。彼らは、そこへ行く途中で清くされた。15 その中の一人は、自分がいやされたのを知って、大声で神を賛美しながら戻って来た。16 そして、イエスの足もとにひれ伏して感謝した。この人はサマリア人だった。17 そこで、イエスは言われた。「清くされたのは十人ではなかったか。ほかの九人はどこにいるのか。18 この外国人のほかに、神を賛美するために戻って来た者はいないのか。」19 それから、イエスはその人に言われた。「立ち上がって、行きなさい。あなたの信仰があなたを救った。」

他の九人はどこにいるのか

奨励者：曾我部ふみ

2008年2月10日にこちらに転入させていただいてから、3年目を迎えました。特に聖餐の恵みにはいつも畏れと感謝でいっぱいであり、今も熱い思いは変わりありません。

このような礼拝の形式が私をソフトに包んでくれます。司会の当番のときは、その余裕がまだありませんが、わたしの穏やかでない、激しい性格がだんだん癒されていくのを感じます。歌で進められていく礼拝がリラックゼーションの働きをもっているように思います。み言葉と共にある音楽の力の大きさを感じています。今は激しい性格から解放されてきていることに、神さまに感謝すると

共に皆様にとっても感謝をしています。

さて、今日与えられた箇所は、お読みいただきましたルカによる福音書17章11節から19節です。この箇所を通して、私なりに理解いたしましたことを自分の病気の経験を通して証しをしてまいりたいと思っています。ここでは、重い皮膚病の人達を扱っていますので、私も重く受け止め、この方々と自分との接点を見つけて証しをしていきたいと思っています。

この聖書では、重い皮膚病と訳されていますが、別の聖書では、まだ、らい病と訳されているものもありました。らい病は、以前、遺伝病や性病と考えられて

いた時代もありました。長い間、偏見と差別で苦しめられてきました。今もそうだと思います。呼び方も時代を経て、ハンセン氏病からハンセン病といわれるようになったと記憶しています。

ずいぶん前になりますが、ベンハーと言う映画を見たことがあります。その時代から、ハンセン病の人はこの人達だけで暮らす場所があり、隔離されていました。外出をする時、人々の前を通る時は、汚れています。汚れていますと言って人が近づくのを避けて通らなければならなかったのを覚えています。

それからもう一つ、松本清張の「砂の器」という映画を見たことがあります。父親がハンセン病となり、村を追われて息子と放浪の旅に出かけます。子供の方は後に音楽の才能を見いだされ、花開くのですが、自分のプライドのため、父親のハンセン病と向き合うことを恐れ（ため）、殺人まで犯してしまうというストーリーでした。

ノルウェーの医師、ハンセンによって伝染病であることが分かってからも長い偏見の時代がありましたし、らい菌の力は非常に弱いものなのですが、人から嫌われ、恐れられた病気でした。日本でも、かつては警察まで動員し、強制的な隔離をしてきました。

どんなにかれらがつらい思いをしたかを知るのに、ハンセン病となり、療養所の中で暮らした歌人に、明石海人がいます。この方の「白描」という歌集の中にこのような歌があります。「父母の

えらび給ひし 名を捨て この島の院に 棲むべくはきぬ」というものです。もしかして少し間違ったところがあるかもしれませんが、この歌の中には家族のために離婚し、本名をも捨てなければならなかった厳しさと深い谷底に落とされたような悲しさが込められていると思います。実際に療養所では仮名で過ごしていて本名は使わなかったとも聞いています。このようにしなければならなかったこの病気を聖書の記事ではイエス様が癒してくださったとあります。死刑または、無期懲役が無罪になったに匹敵するものだと思いますが、それなのになぜ、あとの9人は感謝をしなかったのでしょうか。

いいえ、感謝したのだと思います。これだけの病気が癒されて、感謝がなかったはずがありません。でも、一刻も早くこの病気との関りから抜け出したかった。もう病気であった自分の過去を完全に切り離したかった、何の関りも持ちたくなかったのではないかと考えます。

私は聖書のこの記事と自分を重ねてみました。少しばかり接点があります。高校生の最後の時、皆が大学受験で忙しくしていた時に、結核にかかっていることがわかり、療養所に入らなければならなかったことがありました。私はハンセン病患者の療養施設にはまだ行ったことがありませんが、療養所という点で共通点がありました。その後クラスのみんなは大学生活に入りましたが、ここで私の人生は大幅に狂ってしまい

ました。

療養所で生活をしていたある日、高校の担任の先生から、手紙をもらいました、出席簿の順に 1 番 A 大学 2 番 B 大学・・・そして私のところには C 療養所となっていました。担任の先生は励ましのつもりだったのですが、何とも言えないのを感じました。

親は来年からは働くようにと言ってきましたし、次の年からは、援助はしたくないということを察しました。私も自立したいとの思いがありましたので、まず、働くため、私は療養所を出ることにしました。主治医にお願いして、許可を出してもらいました。こんなところでのんびりと過ごしてはいられないと思いました。私は保菌者ではありません。もうすでに、ご承知のように、当時は、抗生物質であるストレプトマイシン、イソニアジド、パスという薬がありましたので、これを併用して治療がなされていました。現在の治療法は良く知りませんが、ただこの治療で、気をつけなければならないのは、副作用があることでした。

薬物はみなそうだと思いますが、耳に障害が出ることがあります。聞こえが悪くなったり、耳鳴りがしたりします。皆がそうではありませんが、そういうことで、早期に治療することが可能になっていましたが、副作用に気をつけて投薬するのが、当時の治療法でした。

ところで、私はまだ、大学を出ていなかったの、まず、大学で勉強しようと思いました。親に頼る気はありませんで

したので、働きながら学ぶ道を選びました。というよりはこれしかなかったわけです。両方するには、公務員が有利と考えましたので、半ば腰かけのつもりで埼玉県の公務員試験を受けました。筆記は決して難しいものではありません。面接は、まじめなふりをするのは私の最も得意するところです。ですから、これは合格です。問題は健康診断です。なぜ、こんな病み上がりの者を採用してくれたのでしょうか。素人の私だって X 線の写真を見れば分かるのです。治癒しても、病巣は石灰化するので、跡が残ります。骨折も跡は消えることはないと思います。私の場合、今でも X 線写真に跡は映ります。

私は仕事に慣れたころ、大学へ入学しました。心理学を学ぶためでした。都内の大学へ行きました。仕事が終わってからも、90分授業をしっかりと毎日3時限入れていきますと、教職課程を含めても卒業に必要な単位は昼間の学生と同様、4年で取ることができました。1時限目は当然遅刻です。でも、教授たちは、認めてくれました。

ここでの学びは、過去の小、中、高の12年間の学校生活より、この4年間は比べものにならない程充実していました。この時に学ぶことの喜びを知りました。勉強は教えてもらうものではなく、自分で学び、獲得していくものだと思います。

卒業はしましたが、しかし、希望の就職は難しく、そのまま今の仕事を続ける

ことになりました。そして、今に至っています。今年で勤続41年目になりました。還暦を迎え、来年の3月で退職になります。

聖書に戻りますが、10人のうち感謝するために戻ってきたのはたった1人でありました。

この病気をイエス様の奇蹟により癒やしていただいたのに、「ほかの9人はどこにいるのですか。」とイエスはお聞きになりました。もちろん、わたしもこの9人のうちの1人です。両親に経済的な負担をかけずに生活ができたのに、感謝に欠けていました。

41年間も働くことができたのに感謝していなかったのです、私は自分の病気で仕事を休んだことはありません。休暇をいただいたのは、子供の病気や学校行事、親の病気、ずっと昔の教職課程での教育実習の時、ずいぶん図々しく休みを取ったものだと思います。それと産前産後の6週間の休暇で、いずれも病気ではありませんでした。風邪をひいても、熱があっても、流産した時も、同じように勤務ができました。そんなことをしても、その後は体を壊すことはありませんでした。でも、感謝するのを忘れていました。希望の職種につけなかった、出発から1歩も2歩遅れていた、願ってもかなえられなかったことばかり数え、感謝することを忘れていたことに気が付きました。こうだったら良かったと思うばかりで、感謝の気持ちがなかったこと。この準備をさせていただくまで、この9

人のうちの1人であったことにも気がつかなかったこと。そんなことに気がつかないまま、いつか、病気をしないことが当たり前と思って暮らしていたこと。健康で働けることに感謝することもなく生活していたことに気が付きました。本当は、今の仕事に就くことさえもできなかったはずでした。

また、ハンセン病にもどりますが、日本では、1996年にらい予防法が廃止になりました。強制隔離をし、差別してきた法律が廃止になりました。その時の報道を良く覚えています。ハンセン病だった者は、社会復帰したくても、社会の偏見の壁が厚く、困難であったこと。何十年も隔離をされていたから、何をどうすればいいのか、多くの人に戸惑いがあったこと。当時は療養所に入所していた方々へのインタビューを見たり聞いたり、ドキュメンタリーの番組をたくさんみることができました。彼らが高齢者になっていたこともあって、法律が変わっても彼らの社会復帰が難しかったことを記憶しています。それはどんなに悔しくまた残念だったことでしょうか。

今も療養所の入所者数は日本だけでも、約2000人います。年々入所数は減少しています。発病する人が少なくなっていることは当然ですが、社会に復帰することなく、生涯を終わったことを意味しているのではないかと思います。

調べて見ましたら、世界でこの病気の方が、2008年当初の数字ですが、約21万人もいたのです。こんなに多くの

病気の方がいることさえも知りませんでした。考えてもいませんでした。衛生状態の悪いインド、ブラジル、インドネシアなどがその大半を占めています。貧困なども原因と思われます。

私は病気の時や困った時には神さまに求めます。ときどき条件付きで神さまに求めます。時には食ってかかることもありました。求めることばかりで、感謝することがなんと少なかったことでしょうか。

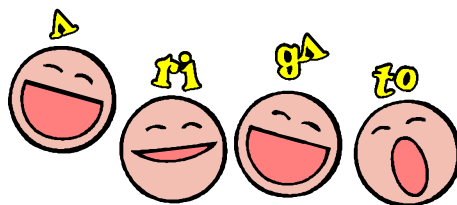
行きなさい。あなたの信仰があなたを救った。立ち止り感謝して、また自分のすべきことを精一杯やりなさい。自分の働きを精一杯やりなさいとたった1人のサマリア人に言っています。偏見や差別からも解放されたのですから、感謝するのは当たり前だと思われますが、でも、このあたりまえのことができなかった者が9割いたということになります。

神様は私にこう言われます。

「いつもぶつぶつ文句を言っているようだけれど、必要なものは与えてきたはずだ。本当は仕事に就くことさえもできなかったはずではなかったのか。けれど、まだ、感謝の言葉を聞いていない。」と

「はい、まったくそのとおりです。」

一巡りの人生を終わって、後悔することがとても多いのですが、感謝の気持ちを奉仕に、喜びを賛美に変えさせていたきたいと願っています。



ルカによる福音書18章1～8節

1 イエスは、気を落とさずに絶えず祈らなければならないことを教えるために、弟子たちにたとえを話された。2 「ある町に、神を畏れず人を人とも思わない裁判官がいた。3 ところが、その町に一人のやもめがいて、裁判官のところに来ては、『相手を裁いて、わたしを守ってください』と言っていた。4 裁判官は、しばらくの間は取り合おうとしなかった。しかし、その後考えた。『自分は神など畏れないし、人を人とも思わない。5 しかし、あのやもめは、うるさくてかなわないから、彼女のために裁判をしてやろう。さもないと、ひっきりなしにやって来て、わたしをさんざんな目に遭わすにちがいない。』」6 それから、主は言われた。「この不正な裁判官の言いぐさを聞きなさい。7 まして神は、昼も夜も叫び求めている選ばれた人たちのために裁きを行わずに、彼らをいつまでもほうっておかれることがあろうか。8 言うておくが、神は速やかに裁いてくださる。しかし、人の子が来るとき、果たして地上に信仰を見いだすだろうか。」

説 教

生きるための祈り

先週は、チリの鉱員たちの地上復帰のニュースで熱い一週間でした。地上から約700mの地下に埋もれて、69日間も暗闇の中で不安とともに過ごしていた33名の鉱員たちが無事に救出され、旨を打つような感動的なこともありました。救出のめどがつき、救出作業のために出てくる順番を聞いたら、「私が最後だ」、「いいえ、私がいちばん最後まで残る」、「いや、私がいちばん最後まで残る」との返事が返ってきたそうです。

一人を引き上げるためにかかる時間が、90分と予測されていたときの話しです。すると、最後まで残る人は、最初に出る人との時間差が2日も遅くなることになります。2ヶ月以上を闇の中で過ごした彼らにとって2日は、それほど長い時間ではないのかもしれませんが、けれど、不安や恐怖を共にしていた仲間が一人、二人、いなくなっていく暗闇の中に残ることから来る心理的な圧迫と恐怖感は軽いものではないはずです。

結果的には、引き上げることにかかる時間が短縮され、24時間以内に33名全員を救出することができました。2ヶ月以上を狭く暗い地下で過ごすことを強いられていた中では、私たちの想像を越えるあらゆることも起きていたことでしょう。そのような過程を経て、最後には、相手のことを思いやれる心。私は学びたいと思いました。33人全員がこれから幸せな生を生きて欲しいと祈っています。

さて、チリのこのような状況を聞きながら、先週は韓国ルーテル教会の27階建て、50周年記念会堂「ルター会館」の奉獻礼拝に招かれ、その他に、宣教協力についても具体的な話し合いをして帰ってきました。そして、韓国ルーテル教会の教団総会にも出席し、桑井先生が日本のキリスト教の歴史と宣教活動について、1時間を越える講演をなさいました。

韓国ルーテル教会は毎年教団総会を開催していますが、今年の教団の宣教のテーマは「互いに重荷を担い合う」でした。「互いに重荷を担い合う」。これは、初代教会の人々の姿から探することができる、模範的なキリスト者のあり方であります。韓国の教会はこの姿を取り戻すことを狙いとしてこのテーマを決めたのでしょうか。

パウロは、ガラテヤ書5章13節でこのように述べています。

「兄弟たち、あなたがたは、自由を得るために召し出されたのです。ただ、この自由を、肉に罪を犯させる機会とせず、愛に

よって互いに仕えなさい。」

パウロはイエスさまの仕える姿に倣い、このように初代教会の人々に向かって述べているのです。イエスさまは、ご自分は、仕えられるためにではなく、仕えるために来たとおっしゃっておりました。ですから、「だれでも高ぶる者は低くされ、へりくだる者は高められる」と、弟子たちにお話しなさったわけであります。

イエスさまのこのような仕える姿に、初代教会は影響を受け、そのまま実践しようと努力したのです。これが初代教会の共同体の特色でもとも言える姿ですが、しかしそれは、「心の平安」とか「個人的な自己実現」のようなことによって、そこからの力によって成し遂げようとすることを言っているではありません。そうではなく、霊的な力、上からの力によってでなければ、本当の意味で他者に仕えることはできないということを言っているのであります。初代教会の力はそこにあったのであります。もちろん、他者の重荷を担うためには、苦しみも受けます。迫害も受けました。

しかし、時代の進みと共にキリスト教の教会の姿を振り返って見ますと、多くのことに初代教会とは異なる点を発見するのです。とても短かった初代教会の時代を経て、教会は制度化され、階級化されました。宗教改革以前の中世の教会は、この世に仕えるよりは、この世を治めるような姿でありました。ヨーロッパの世俗的な国の

王たちは、教皇の下にあり、教皇が王たちを治めていました。職業は、聖職と俗職に区別され、聖職者にいる神父や修道士やシスターたちは一般の人より高い階級にあると考えられ、尊敬を受けました。仕えることによって教会を形成していた初代教会の姿は跡もなく、教会はこの世を納める役割にまわり、腐敗していったのです。

そのような腐敗した教会を変えようと、マルチン・ルターが立ち上がりました。ルターの宗教改革の精神は、初代教会の仕える姿を取り戻すことにあったと言えるでしょう。聖職と俗職とに区別するのではない。万民祭司性を強調し、一般信徒でも祭司の一人であるとして、当時の聖職に対する考えをひっくり返しました。その力、中世の腐敗した大きな組織を取り崩していく力、それはどこからくるものでしょう。

ルターは、祈る人でありました。忙しい日であればなおさら、忙しい分だけ祈ることを実践する人ルター。彼は、上からの力によってこそ大きな壁となっている中世の教会と向かい合ったわけであります。

また、インドのカルカッターで、人々の必要を満たして、道端で死に行く人々の尊厳を取り戻し、人間らしくしに行く道を備える働きに遣わされていたマザー・テレサは、まさにこの初代教会の姿そのものでありましょう。貧しくて、見捨てられて、道端を死を迎える場としてしか生きられない人々のために人生を捧げられる力。その「仕える」姿。上からの力によってであり

ました。小さな彼女の中に大きな神さまのパワーが宿っていたのです。

さて、今日は、社会的に何の力も持っていない一人のやもめの耐えない訴えを、社会的な階級の高い裁判官が受け入れるということを比喻にして、神さまに対して祈ることを教えておられるイエスさまのお話しが日課となっています。

やもめ。きっと彼女は何か不当な処分をされたのでしょうか。やもめは、社会の中では力がない立場に生きることを強いられ、隅っこに追いやられて、小さくされた存在でした。その彼女が、具体的にどんなことかわかりませんが、不当なことをされました。しかし彼女は、諦めずに階級の高い裁判官と向かい合っています。やもめと裁判官が向かい合うということは、壁と玉子が向かい合っているようなものです。ぶつかったら割れるしかない弱い存在、それがやもめなのです。しかし、彼女はその壁とまっすぐに向かい合うことを選択し、自分らしく訴えはじめます。決して、社会のシステムや裁判官の言いなりになって生きるような生き方はしない。自分にだけ与えられている道をまっすぐに歩みたいと、壁に向かって訴えはじめたのです。彼女をそこまで動かす力。これは、人間の力ではありません。与えられている力でなければ、涙ぐんで、社会の底辺へ下がるしかない、そんな位置にされていたのですから。

イエスさまは、この女性のように、自

分自身を諦めずに、不当な処分を受けたならば諦めずに、訴えたいことがあったら最後まで、祈りなさい。訴えるべき方に訴えなさいとおっしゃっておられるわけであります。

皆さんは一日どれくらいお祈りをしていますか。

静かな時間を設けて、自分と神さまとだけの会話の時間を、皆さんは持っていますでしょうか。

けれど、私たちは、何も問題がない時はあまり祈りません。しかし、何か、一人では担いきれないと思えるようなことが起きたときに、その時にはどうしようもないから祈ってみます。ところが、ある程度祈っても解決できなかつたら折角始めた祈りを辞めてしまいませんか。祈ってもしょうがないと思うから、辞めてしまうのです。または、事のたいへんさのあまり、最初から諦めて祈ることを諦めたり、この世のやり方に任せたりするときが多くあります。

このような話があります。

20世紀初めの頃中国で活躍していたウォッチマン・ニーという人の話です。彼は、キリスト教作家として、教会の指導者としても有名な人ですが、中国共産党から迫害を受けて、最後の20年を牢獄で過ごした人でもあります。彼が20代ごろ死ぬ病気にかかりますが、死を前にして、神さまに節に祈りました。そんなある日、幻のような夢のような境地に彼は置かれま

す。幻の中で、世界で三大長い川と呼ばれ、中国のゴールデン水上ルートとも呼ばれる揚子江を舟に乗って上っていました。ところが、上る途中、川の真中に大きく出っ張っている岩に出会わされます。一所懸命櫓(ろ)を漕ごうとしますが、舟は後ろに下がるばかりです。彼は落胆してもう上るのを諦めようと思いました。ところがその瞬間、天から声が聞こえます。「その岩を移そうか」それとも「岩の上にまで川の水を増やそうか」という声です。彼は慌てて「水を増やしてください」と答えました。すると、出っ張っていた岩の上を船が余裕で渡れるほどの水が増え、船は川を上ることができた、という話しです。

私たちの人生の人路には、このウォッチマン・ニーの川の旅と似ています。必ずと言えるほど、人生のどこかで、大きな岩が置かれる時があります。すでに、大きな岩に出会ったことのある方もいらっしゃるでしょう。今、大きく出っ張っている岩に向かい合っているかたもいらっしゃるかもしれません。それとも、これからの歩みのどこかでそういうときに置かれるかもしれません。そんなとき、私たちは迷ってしまいます。どうすればあれだけ大きな岩が動くのかと、さ迷ってしまうのです。そして、動くはずかないと諦めて、岩の生で目標を達成できなかったと、岩の方に責任を追及したりするのです。出っ張っている岩のせいにしてしまえば、楽だし、他の人も納得してくれる最もの理由になりますから、堂々と逃げていけます。しかし、

そうやって変更した他の道では、岩に出会わないのでしょうか。

確かに、そんなときには、岩のような大きな問題に出会ったときに祈りなさいと言われて祈ります。しかし、祈っても、岩は、依然として私たちの前にあります。消えません。けれど、その岩の上を、余裕を持って渡れるようにしてくださる力というものは、祈らなければ与えられない力であり、祈って見なければどうやって与えられるかも分からないものであります。私たちの祈りに耳を傾ける方が、今、私たちがどのような時点で、何とぶつかっているのか見ていてくださり、そこを乗り越える力を与えてくださるのです。いいえ、私たちを背負って、ご自身がその川を渡っていくのです。

ですから皆さん、祈るということは、自分にはあの岩のような問題を動かす力がないことが分かるから祈るわけであり、人が祈るということは、神さまの前に謙虚に生きる人の姿なのです。初代教会の人々はこのことを悟った人たちでした。そしてルターも、マザーテレサも、祈りを通してこそ得る力によって人々に仕えて生きたのであります。

人は何も問題がない時は祈りませんし、何の問題も起きなければ祈ることができないかもしれません。しかし、人は、何も無いときに祈る習慣がなければ、たいへんなことに出会ったときに祈ることはでき

ません。日々、絶えず、どんな時にも、折が良くても悪くても祈りの週間をつけていなければ、隣の人がたいへんな状況にあることを見えても、その人の重荷を分かち合うための祈りはできません。すぐ隣の家族であっても、その人が抱えている悲しみや苦しみを分かち合えないのです。つまり、「自己実現」や「心の平安」を保つために教会生活を送り、そのためにだけ信仰を養っているのならば、自分の中身は実現されて強いかもしれません。しかし、困っている他者に対しても、自分のことは自分で解決するのだ、というような姿勢でしか向かえ合えないのです。

一つたとえ話をして終わりにしたいですが、峠を越えて向こうの村へ行かなければならない、ある寒い日の夜、峠の道端に人が倒れてしまいました。最初の一人は倒れている人の傍を素通りしていきます。寒い日に一人だけでも峠を越えるのがたいへんなのに、倒れている人の面倒まで見ながら越えることは考えられないと思ったのです。しかし後から来た人は、倒れている人を見ると、その人を負ぶって峠を越えました。素通りした人は途中で凍死してしまい、背負って越えた人は、背中の人の方が重くて、たいへんで、汗を流したために二人とも生きられたそうです。

困っている人の重荷を担う中で、その人に仕えるということは、同時に、自分が生きることでもあります。つまり、共に生きる真の道であります。

イエス・キリストは、そのいのちを捨てるまで人々の重荷を担い、仕えてくださいました。私たちと共に生きるために死んでくださったのです。それが十字架の愛であります。その十字架の愛が、この教会につながり、み言葉につながるひとり一人に生かされていることと信じます。今週も、この愛に押し出されて、隣人と共に生きるひとり一人でありますように、祈ります。

祈ります。

私たちの重荷を担って主は十字架を背負い、けわしい道を歩んでくださいました。その十字架の愛のゆえに、私たちは罪に滅ぼされて死なずに、今、生きています。そして、主の十字架の愛は、私たちの中に受け継がれ、私たちを通して、まだ主の愛を知らない人々に伝えられていきます。神さま、あなたの愛を分かち合うために必要なものを与えてください。そして、あなたの愛を分かち合うために必要ではないものを自分から切り捨てる勇気を与えてください。何より、私たちが絶えず祈る者でありますように。私たちのために十字架で死に、大きな愛を示してくださった主イエス・キリストのみ名によって祈ります。アーメン。



11月の教会のイベント & 梁のスケジュール

2日〈火〉～ 4月〈木〉

韓国の済州道旅行

ハングルクラスで学んでいる生徒たちを中心に、梁が引率します。

7日〈日〉

全聖徒主日

み許に召された信仰の先輩たちが私たちと共に礼拝していることを覚え、共に礼拝する日です。写真をもってきてください。

9日〈火〉

全国教職者会議（臨時）

14日〈日〉

成長・収穫感謝礼拝

礼拝後、チャーチコンサートが行われます

23日〈火、祝日〉

故小野ひさゑさんの50日記念会が当教会にて行われます

ご都合の合う方はどうぞどちらの主日にもご出席ください。

お待ちしております。



【2010年11月礼拝予定】

【主日礼拝】毎週日曜日 朝 10 時 30 分～

11月7日(日) 全聖徒主日礼拝

聖書：歴代上 29：10～13、2テサロニケ 2：13～3：5、ルカ 19：11～27

主題：神に委ねられて生

11月14日(日) 聖霊降臨後第25主日礼拝

聖書：マラキ 3：19～20、ユダ 17～25、ルカ 20：27～40

主題：神に命与えら生きる

11月21日(日) 聖霊降臨後第最終主日礼拝

聖書：イザヤ 52：1～6、1コリント 15：54～58、ルカ 21：5～19

主題：いのちの神

11月28日(日) 待降節第1主日礼拝

聖書：イザヤ 2：1～5、ローマ 13：11～14、マタイ 21：1～11

主題：救い主の到来

(説教主題は今のところの予定です。変更になる場合もあります。)

【その他の集会】

- ・ 第一・第三水曜日 午前 11 時より ヨハネによる福音書の学び
- ・ 第二・第四水曜日 午前 11 時より ハングルクラス。
- ・ 第二・第四木曜日 午後 7 時より 新しい視点による聖書の学び
「虹は私たちの間に」山口里子著購読。
- ・ 第四木曜日 午前 10 時 30 分～ 家庭集会(田嶋さん宅)
- ・ その他、随時(希望にあわせて)キリスト教入門講座・面談など行なわれています。



大宮シオン・ルーテル教会

〒 331-0814 さいたま市北区東大成町 1-229

Tel/Fax 048-663-0215

URL : <http://omiya.church.ne.jp>

Email : himei-y@oregano.ocn.ne.jp